

報告——第21回「周作忌」の集い

「ここだけは、仲間たちと心置きなく、
遠藤周作を語れる!!」

今回も、愉しく、賑やかに、「周作忌」

前日の雨も上がり、東京は秋らしい爽やかな青空が朝から広がっていた。日差しは、未だきつさを残している。メトロの出口を出て、東京・一ツ橋の如水会館まで歩く数分間でも、肌には残暑の名残が感じられる。遠藤周作は、悪天も好天も、天気を左右するといわれるが、この日は、「周作忌」らしい好天に恵まれた、というところか。

如水会館2階の「オリオンルーム」。会場には、9つのテーブル。銀屏風を背景においたステージ。壇上の上手には、遠藤周作の遺影と二つの小ぶりの花籠（白、紫、クリーム色の花が清楚だ）。写真は、椅子に座った横向きのもので、談笑中と見受けられる。入口



壇上の遠藤先生

左手にも別の遺影とともに飾られた大きめの花瓶に花々が咲き乱れている。白い花は、コチョウランとカサブランカ、紫、薄紫、それに緑のカーネーションもある。緑の花は、色素を吸わせて色をつけているのだ、とは、如水会館の担当者の話。花々は、遠藤周作の歯科の主治医だったクリニックからの贈り物。遺影は、右手を後頭部に当てて、のけぞるような感じで隣の椅子に右ひじを載せているお馴染みのポーズ。右手を額の横に当てて思索のポーズをとるのが夏目漱石文学の真髄を示す写真ならば、狐狸庵流のポーズをとる、この遺影は、これに匹敵する親近感のある「文豪」写真ではないか。

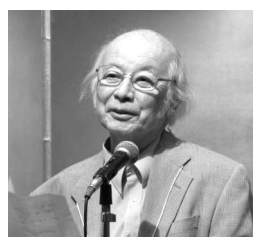
第21回「周作忌」の集い

9月29日は、遠藤周作が亡くなった日。夏の猛暑、大雨、地震など日本列島の各地には災害の爪痕が今も残って



会場風景

午後6時過ぎ、高橋千劍破幹事の司会で第21回「周作忌」の集いが始まった。まず、冒頭は「周作クラブ」会長で作家の加賀乙彦さんの挨拶。「今年に入って、私がしたことは、入院と手術でした」。1月入院、手術。4月22日、米寿の祝い（おめでとうございます）。5月再手術（「周作クラブ」の新年会も、軽井沢への「原点の旅」も欠席した）など。「2月7日の大阪城ホールで開かれた「高山右近列福（れつぷく）式」にも欠席した」。



加賀乙彦会長

（注）高山右近は大名としての地位を捨て、信仰を貫いた殉教者として、ローマ教皇庁より、没後400年を経て「福者」に認定された。「福者」とは、カトリック教会において、信仰の模範を示した信者に与えられる称号。2月、大阪城ホールで高山右近が福者の列に加えられる「列福式」が行われた。

「今年前半は、具合が悪くて、入院が続いた。この頃は元氣を取り戻し、少しずつ歩くようになった（お元氣になつて、何より）。さて、何を話しますか。カトリックのこともいろいろあった。5月、皆川達夫中世音楽合唱団65周年記念演奏会があった。私は、遠藤さんが小説にしなかった高山右近

やペトロ岐部を主人公にした小説を書いてきた。改めて遠藤さんのことを思い出した年だった」、などなど。

「さいなら 吉岡さん」

次いで、「音楽座ミュージカル」の女優・高野（こうの）奈々さんが登場。ミュージカル『泣かないで』（原作は、遠藤周作の『わたしが・棄てた・女』）から、「会えない日々」というミュージカルのテーマソングと「泣かないで」の2曲を披露してくださった。盛大な拍手で歌が終わった後、加藤宗哉幹事が高野さんにインタビューした。高野さんは、2010年以来、主役の森田ミツを3回演じたという。「この役を演じるのは、難しい。森田ミツの人生を引き受けることになるから。劇中では、『さいなら 吉岡さん』という科白が、印象に残っている。森田ミツの周りの人々への愛を感じる」。



高野奈々さん

『沈黙—サイレンス—』秘話

続いて、挨拶に立った遠藤周作の長男・龍之介さんは、映画『沈黙』に関するエピソードを紹介した。「毎年、父の命日に集まって戴き、感謝します。今年は、なんといつても、1月に公開

「周作忌」



遠藤龍之介さん

された映画『沈黙』。マーチン・スコセッシ監督は、20数年も構想を練る中、資金の問題もあり、映画化はなかなか実現しなかった。宗教の映画は当たらないという。私も、無理かなと思った時期もある。スコセッシ監督は公開を前に、去年の11月から3週間日本に滞在した。宿泊しているホテルを訪ねた。1泊200万円の部屋にお邪魔した。完成した映画は、カドカワの試写室で、一人で観た。まだスーパード（字幕）の入っていない版だった。時代考証もすっかりしていて、非常に良い映画だと思った。17世紀の日本の村落が「饒舌」に映し出されていた、と思う。観た後、映画の感想をと言われていたので、試写中も何を言おうかと緊張した。最後のシーン。クルス（十字架）の埋葬は、原作にないシーンなので、それを言おうと思った。映画では、落ちこぼれて行く人とそうでない人を対比して描いているのも興味深かった。弱い人間を応援している。絶対的な善とか絶対的な悪とかは、ない。そういうメッセージを感じ取った。これは、遠藤文学にも通じるところがある」。

さらに、映画『沈黙』関連では、もう一人。映画の中で村人を演じた山田将之さんも登場し、撮影秘話などを披露してくださった。主演した俳優との交流などが興味深い。ちょっとしたシーンにもこだわり、同じシーンを繰り返し撮影するスコセッシ監督の演出ぶりも貴重な話。作品の中では、やはり、ラストシーンだという。「手の中に握られたクルス。最後にあれがあるかどうかで、信仰心が明確になったと思った。映像も素晴らしかった。映画『沈黙』に参加できたことは、役者冥利だ」。



山田将之さん



黒井千次顧問

献杯は、「周作クラブ」顧問で作家の黒井千次さん。「遠藤周作は、いろいろな面を持つていた。創作にあたっては、なんでもない小さな場面にとらわれた人。遠藤周作に対する接し方は、各人各様。接し方によって、様々な面が現れた、と思う」などと、遠藤文学の真髄につながる解説をしてくださった。

皆さん、揃って献杯した後、参加者たちは、テーブルの料理に手を伸ばしたり、グラスを傾けたりして、それぞれのテーブルで談笑の輪を広げた。暫く、懇談の時間が流れ、笑いの花があちこちで大きく咲く。ほかの方々の話も興味深いものがある。あつたけれど、紙幅の関係で省略させていただきます。皆さん、悪しからず、お許しください。



なごやかな歓談

午後7時50分。宴も「中締め」の間となり、宮辺尚幹事が、挨拶に立つ。「去年の周作忌で20年と言っていたら、もう、21年目が来てしまつた。また、一年経つた。ここに集うと、遠藤周作が生きているみたいに感じる。ここだけは、仲間たちと心置きなく、遠藤周作を語れる。遠藤さんの話を皆さんが生きて話すからだろう。嬉しいですよ。高橋幹事の「宴酣（たけなわ）ですが、ここは、これにて流れ解散」ということになったのが、午後8時。楽しいひと時は、あつという間に終わってしまう。一日は長く、人生は短い。来年も、また、皆さん、元気で顔を見せてください。

（記・大原 雄／写真・田村百合子）